The Psychology of Early Adolescent Females with School Refusal Problems in "The Witch of the West is Dead" : Psychoanalytic and Object Relations Theory Perspectives

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): early adolescent, school refusal, Object Relations Theory, transitional object, oedipal complex 作成者: NEMOTO, Mayumi メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3871

BY-NC-ND

「西の魔女が死んだ」に見る不登校を呈する思春期女子の心理
―精神分析・対象関係論の観点から―

心理学部　臨床心理学科　根本　眞弓

要旨：本稿は、梨木香歩の「西の魔女が死んだ」を素材として、思春期女子の不登校について考えるとともに、その内的世界について、精神分析・対象関係論の観点から考察したものである。

思春期の子どもが不登校になる要因として外的、内的要因が考えられるが、私はそれに発達的要因を加え、移行期における“一旦休止”としての不登校があることを示した。児童期までを良い子で過ごした子どもや、十分な依存関係を持てなかった子どもは、思春期への移行が始まった時、古い自己と新しい自己に亀裂が生じ、発達の連続性を保てず混乱する。彼らは現実から身を引き“一旦休止”することによって、その時空間を新たな自分を創造する移行空間として使用し、自分自身や親との関係を見つめ直すことを通して健康な成長を遂げていくのである。その時、子どもに安心と安全を供給し、子どもからの理想化を引き受ける一方でそこからの脱錯覚とその修復を共にする、母親の代理対象（移行対象）の重要性について考察した。さらに「前エディプス期」「エディプス期」の混在した移行期の女の子の内的世界についても言及した。

キーワード：思春期、不登校、対象関係論、移行対象、エディプス・コンプレックス

Ⅰ，はじめに

思春期は身体的な成長速度の上昇によって、身体バランスが崩れ、身体像が変化し、第二次性徴が現れ、性腺刺激ホルモンが放出される時期である。身体の変化は“今までの自分と違う自分を感じ始めて、自分でも説明のつかない不安な気持ちに襲われる”（皆川，1985）体験となる。ウィニコット（1968）が“新たなイドの進攻を自我機構はどのように迎えるのか。問題少年少女に特異な人格パターンのなかで思春期の変化はいかに受け止められるのだろうか。青春時代の男の子や女の子は破壊のための新しい力や殺すことさえもできる力をどのように取り扱うのだろうか”と述べたように、内側から突き上げてくる衝動や攻撃欲動の高まりも彼らを不安にする。このような身体・欲動の変化によってもたらされる内的危機だけでなく、親離れや、アイデンティティの形成といった心理的課題にも取り組まなければならない。

また、新たな自己への変容は、乳幼児期に形成された愛着・依存対象としての父母表象の喪失、児童期のアイデンティティや自己像，身体像の喪失の上に成立する。すなわち親への幼児的な愛着からの離脱や喪失によってもたらされる不安に加えて、新たな自己像や対象像の獲得、新しい世界へと踏み出す事への恐れも思春期の子どもは体験しているのである。思春期は喪失と獲得という相反するベクトルの上に存在すると言えよう。これらの不安や恐怖に圧倒されるのか、抑圧や否認といった心的防衛の元に置いて回避するのか、混乱を受け止め克服していくのかなど、思春期の体験は様々であるが、そこに不適応や病理と結びつく心的状態が生じることにもなるのである。

“移行と変転の時期”（北山，2001）の中で思春期の子ども達は、この喪失と獲得のプロセスをどのように体験し、どのように心の中に収めて大人への変容を成し遂げるのであろうか。その時、大人達は子ども達とどのように関わることが望まれるのであろうか。

小論で取り上げる「西の魔女が死んだ」は、不登校になったまいという中学１年生の少女が、祖母との関係を通して成長していく物語である。そこには思春期の女の子の心理的発達課題や、対象関係、内的世界が生き生きと描かれている。この「西の魔女が死んだ」を素材として、不登校について考えるとともに、“移行と変転の時期”にある思春期女子の内的世界について、精神分析・対象関係論の視点から考察を加える。

Ⅱ，あらすじ

本論文で取り上げる視点を中心にあらすじをまとめ

る。

1，祖母の家へ

本の題名にもなっている「西の魔女（祖母）が死んだ」ところから小説は始まる。2年前、中学1年の5月から不登校になった主人公まいが祖母の家で暮らした1ヶ月の出来事が中心に描かれている。主な登場人物は、まいが「西の魔女」と呼んでいるイギリス人の祖母、単身赴任中の父親、仕事に忙しいハーフの母親、祖母の近所に住むゲンジという男性である。祖父はすでに亡くなっている。

単身赴任中の父親にまいの不登校を告げる時、母親がまいのことを「優等生で感受性が強すぎる子、昔から扱いにくい子、生きていきにくいタイプ」と話すのを聞いたまいはショックを受ける。母親は不登校になったまいを自然豊かな祖母の家で休養させることにした。祖母の家で昼食用のレタスを取りに行ったまいは、そこでなめくじと遭遇する。その直後、締まり無く太り目だけが異様に光る男ゲンジに声をかけられる。まいがしばらく祖母宅で過ごすことを伝えると「ええ身分じゃな」と言われ、はらわたが煮えくりかえるほど腹を立てる。翌日母親が帰る時、ひとり残される寂しさをまいは寝たふりをしてやり過ごす。まいは今までにも時折、訳もなく暴力的な心の痛みを伴う孤独感を感じることがあったが、いつもそれをやり過ごしていた。その日まいは祖母のジャム作りを手伝い、曾祖母が超能力（魔女の能力）によって曾祖父の命を救った話を聞いた。その夜、まいは真っ暗な海をひとりで泳いでいる夢を見た。その時「西へ」という声がまいの心の内と外に響いた。

2，魔女修行の始まり

翌朝まいは、祖母に魔女修行を願い出る。祖母は魔法や奇跡を起こすには、正しい方向にアンテナを立て、それを体と心でしっかり受け止める精神力が必要であり、「いちばん大切なのは、意思の力。自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げる力」だと話した。まいは次の日から、規則正しい生活と意志を強くするために家事や勉強のプランを立てそれを継続することにした。森の中の日だまりのお気に入りの土地を祖母からもらったまいは、そこにお花畑を作り「まいの場所」（サンクチュアリ）とした。

ゴミ出しに行ったまいは、小学校の頃、その道を大きなシマヘビが鎌首を持ち上げて横切るのを見て恐怖を感じたことを思い出した。そしてゴミを置こうとした時、裸の女の人が奇妙な姿態で載っている雑誌が置いてあるのを目にした。そこは暗い陰湿な臭いを発散させているように感じた。置いたのは下品で、粗野で、卑しい男のゲンジに違いないと、まいは嫌悪感と憤りで息が詰まりそうになった。

まいが祖母と暮らして3週間が過ぎた頃、庭の鶏小屋が襲われ鶏が殺される事件が起きる。何とも言いようのない切なさと悲しみでいっぱいのまいは、ゲンジの犬の仕業に違いないと憎しみの感情をもつ。

日だまりのいつもはまいのお気に入りの場所も、その日はザワザワしていて「ゆうべの、ゆうべの、あの惨劇－闇を切り裂く断末魔－ああ、厭わしい、厭わしい－肉を持つ身は厭わしい」と声が聞こえたように感じた。その夜まいは、何年もの間考え続け恐れてきたこと「人は死んだらどうなるのか」という問いを祖母に向けた。パパが「死んだら最後」何も無くなるし、もしまいが死んでも皆は普通の生活を続けると答えたことを祖母に伝えながら、まいは泣きじゃくった。祖母は、人は魂と身体が合わさってできているが、「死ぬと魂は身体から離れて自由になる」、魔女は「十分に生きるために死ぬ練習をしている」と話した。バラバラの鶏のことを思いながら、「苦しむために身体ってあるみたい」と言うまいに、祖母は「魂は身体をもつことによってしか物事を体験できないし、体験によってしか魂は成長できない」春になると種から芽が出るように「魂は成長したがっている」と語った。

その夜まいは蟹になった夢を見た。柔らかい身体の赤ちゃんから大きくなると硬くなり、身体の核まで硬くなりそうになると脱皮がはじまった。まいは、死んで魂が身体を離れるのはこんな感じかと思った。祖母は自分が死んだら「魂が身体から離れた」とまいに知らせると約束した。

ゲンジが鶏小屋の工事に来た時、まいは、ナメクジが這った跡に白い帯がつくように、ゲンジの通った跡には生臭さが残ると感じた。ゲンジが家にいると思うと喘息の兆候が現れるくらい嫌悪していた。後日、祖母からゲンジに修理代を渡しに行くよう頼まれたまいは、魔女修行だと思って出かけたが、学校を怠けて遊んでいるというゲンジの言葉に、屈辱と怒りとそれを抑えようとする力が交差して何が何か分からなくなった。ゲンジの犬が鶏を殺したとの考えを祖母に伝えると、祖母はまいの思い込みを「直感は激しい妄想となって人を支配する」と注意し、魔女は感情に支配されないものだが、まいの心が「疑惑や憎悪」で支配されていると指摘した。まいは初めて祖母に反論したが、祖母の言葉に不承不承従った。

3，父親との再会

半年ぶりに会う父親から、不登校になった自分がどう思われているか不安なまいだったが、父親からは、家族3人で父親の赴任先に暮らすという意外な提案がもたらされた。それは母親が仕事をやめることと、まいの転校を意味していた。その提案はまいを「いつまでもこのままではいられないのだ」と、切ないような懐かしいような気持ちにさせた。まいは父親の為のベットメイクや身の回りの世話をした。この頃のまいは、言われなくても自分で率先して家事をテキパキとこなすようになっており、そのまいの変化に父親は驚く。まいは、不登校になった理由を祖母に話した。去年まではうまくやれた女の子同士の心理的駆け引きが、急にあさましく卑しく思えて一切やらないでいたら、周りと敵対し孤立してしまったのだった。転校は敵前逃亡ではないかと言うまいに、祖母は「魔女は自分で決める」と言いつつ、「自分が楽に生きられる場所を求めたことを後ろめたく思う必要は無い」と話した。まいは祖母に誘導されているようだと、遠慮せず率直に自分の考えを祖母に伝えた。

4，祖母との対立

結局、まいは転校先を「魔女修行の場」とすることに決め、下見をして自分で学校を選びたいと父親に伝えた。祖母の家を出ることになったまいは、日だまりの「まいの場所」に向かった。そこでゲンジと遭遇した。ゲンジが鍬で祖母の土地の境界線を犯していると思ったまいは、自分の聖域を侵されたように感じて激しい憎悪を感じた。祖母の土地を搾取していると言ってもゲンジの肩をもつ祖母に対して、まいが「あんな汚らしいやつ、死んでしまったらいいのに」と言った時、祖母はまいの頬を打った。まいは泣きながら叩いた祖母を恨むとともに、祖母ともうまくいかなくなったのもゲンジのせいだと憎んだ。まいは祖母との間にしこりを残したまま、祖母の家を後にした。

その後2年間、まいは毎日学校に通っていた。独特の価値観をもち人と群れないショウコという親友もできた。まいは自分で決めたことを黙々と最後までやり抜く魔女修行を続けていた。祖母とのしこりについて、魔女にあるまじきお互いの「感情の流出」だったと考えるようになり、一人置き去りにした祖母への罪悪感を感じていた。次に祖母に会ったら自分の気持ちを全て伝えようと思っていた矢先、祖母の死の知らせを受けとる。

5，祖母の死

まいは、悲しみよりも取り返しがつかないという恐ろしい後悔の念と、悲痛な思いで混乱していた。祖母の亡くなった姿を見たまいは、あまりに辛く、その感覚を麻痺させるための繭に包まれているように感じていた。「この人はこういう死に方をする」と感情なくつぶやく母親を見て、まいは捨てられた子どものようだと感じた。まいを部屋から出して祖母と2人になった母親は爆発するように泣いた。祖母の好きだった花を泣きながら差し出すゲンジと、まいは初めて嫌悪感なしに話した。ゲンジには以前のような横柄さや威嚇する態度は微塵もなかった。その後まいはガラスに「ニシノマジョ　カラ　ヒガシノマジョ　ヘ　オバアチャン　ノ　タマシイ、ダッシュツ、ダイセイコウ」とあるのを見つける。祖母は死んだらまいに知らせるという2年前の約束を覚えていたのである。まいは祖母の溢れんばかりの愛を身体中に実感した。それはまいを覆っていた繭を溶かし、封印されていた全ての感情を蘇らせた。同時に祖母が死んだという事実も実感させた。思わず叫んだ「おばあちゃん、大好き」との声とともに涙は後から後から流れた。その時まいは「アイ・ノウ」という祖母の声を聞いた。

Ⅲ，思春期の訪れと心の変転

1，移行期の“一旦休止”としての不登校

まいが不登校になった要因について考える。

思春期の子どもが不登校になる理由は様々であるが、大きく分けると外的要因、内的要因の2つに分類することができる。外的要因とは崩壊家庭、経済的困窮、虐待、成績不振、虐めなどが背景にあり、現実状況が不適応に大きく影響を与えているケースで、心理療法に加えて環境調整が必要となる。内的要因とは、乳幼児期から児童期までの養育の過不足や乳幼児期の混乱が思春期に再現されることで不適応を顕在化させるケースである。乳幼児期の精神発達が思春期において再演されるというフロイトの2相説や、マーラーの乳幼児期の分離－個体化理論、離乳体験が思春期で再演されるというクラインの理論が子どもの内的世界の理解に寄与する。私はこの2つに加えて、発達的要因から生じる不登校もあると考えている。移行期を迎えた子どもの中には、古い自己から新しい自己への移行に躓き、前進することも後退することもできずに立ち止まってしまい、現実（学校）から退避してしまう子どもがいる。私はこの退避を否定的に捉えるのではなく、“一旦休止”と意味づける事によって、子どもが自分自身や両親との関係について考える時空間を保障する事が、子どもの成長に寄与すると考えている。中井（2011）

は、生理的リラックスや生活のリズムをつくる“踊り場”として学校を休むことの有効性について言及している。私はそれだけでなく、自身の変化に戸惑っている子どもの状態を理解しつつ受け止め、情緒的エネルギーを補給する大人の見守りの元になされる“一旦休止”は、子どもの心に考えるスペースをもたらし、新しい自己の創造を促進すると考える。

主人公まいは、この移行期の“一旦休止”タイプの不登校として捉えることができる。このタイプの多くは、まいがそうであったように幼児期や児童期に依存欲求や感情を抑圧して“優等生”“良い子”で過ごしてきた子どもや、早期自立をしてきた子ども達が多い。思春期の子どもの心には乳幼児期の理想化された親イメージへの幻滅が生じるが、“良い子”はそれを抑圧や否認という心的防衛によって回避しようとする。この内的な心の動きと外的には良い子であろうとすることから生じる、葛藤や不安を抱えられなくなった時に“一旦休止”が選択される。思春期に生じるイドの進攻による衝動性や攻撃性の高まりも優等生の心を不安にする。それまで反発をしたことのない良い子は、衝動や攻撃性が心に浮かぶ事も、いわんやそれが漏れ出すことは身の破滅であると感じており、その表出を恐れるが故に現実から退避し、引きこもることを選択するのである。

幼児期や児童期を“優等生”として過ごしてきた子どもが思春期を迎えると、その内的世界では“良い子”である「良い自己」と、衝動や攻撃性をもった「悪い自己」が存在し始め、良い子としていられない自分に気づきながらも、それまでの自分を失うことも恐ろしく、そうかといって衝動的な自分を認めることもできず、「良い」・「悪い」に分断された自己に戸惑いと不安を感じて、前進も後退もできず不登校になると考えられる。学校に通い今までの生活を続けることは、時間の流れとともに前進してしまうことになる。ウィニコット（前出）が“青年は未成熟である・・未成熟性は青年期の健康にとって本質的要素である。未成熟性に対する治療法は唯１つある。それは時の経過であり、時がもたらす成熟への成長である”と述べるように、このタイプの子ども達は、学校から一時的に身を引き、家に引きこもることで時間を止め、自らの心身の成長速度を遅らせることによって、古い自分から新しい自分への変化に対処するための時間と空間が必要なのである。

“一旦休止”タイプの不登校の子どもが現実に戻っていくためには、まいが祖母との間でなしえたように、学校という現実世界から離れ、安心と安全が与えられ守られた移行空間の中で憩う時間が大切となる。移行空間において、信頼できる対象から受け止められる中で自分について考え、新たなものを探索し、挑戦し、対決し、失い、失ったものについて考え、新たなものを獲得しながら成長していく。この時、まいの祖母のような現実の対象がいる子どもは幸いである。そのような場も対象も得られない時、祖母の家に代わって面接室が、祖母の代理としてセラピストが機能することになる。単純に転地療養を勧めるものでも、祖母の所に行けば良いと言ったことを意味しているのでもない。学校という現実からしばらく距離を置くことを許容し、子どもが自分と向き合えるような時間と空間を与えること、心の動きに寄り添い安心と安全を与えることが重要である。守られた環境と信頼関係が形成された母性的関係の中でしばし憩い、良い対象像を内在化し、エネルギーを補給した子どもは、自らの意思で新しい世界へと踏み出すことが可能となるのである。

2, 母親との関係

思春期の子どもは、この時期活発になる性欲動や攻撃性によって衝動コントロールの問題に直面し、幼児期にトイレット・トレーニングによって母親から支配（コントロール）された肛門期のテーマが再演されることになる。彼らが自律性や主体性が脅かされることに過敏で、自分をコントロールしようとする者に対して強く抵抗するのはそのためである。まいの不登校は、女の子同士の駆け引きがあさましく感じられ、何でも一緒に行動する女子の付き合いを辞めたことが引き金になっている。群れることで安心していた児童期の友人関係のあり方からの離脱が生じたのは、集団に埋没することなく自律性と主体性を獲得した自己（アイデンティティ）を形成するための心が働き始めたことや、まいが思春期の移行期に入ったことを示している。まだ自己を確立していない思春期のとば口にいる子ども達にとって、他者と同じであることが自己を支える支柱であり、群れからの離脱は孤独を意味する。しかしこの年代の子どもはまだ孤独に耐えられるだけの自己を確立してはいない。耐えがたい孤独と疎外感がまいを学校から遠ざける一因になったと思われる。まいは学校だけでなく家庭でも孤独であった。一人っ子で父親は単身赴任、仕事が忙しい母親との２人だけの生活環境は、まいに「胸が締め付けられるような寂しさと孤独」をもたらしていた。揺らぐ自己と共に学校でも家でも孤独であるということは、大人の想像を超えた不安や恐怖を子どもの心にをもたらす。

友人関係から孤立し家に引きこもったまいは、母親からの保護を求めて「私はもう学校へは行かない。あそこは私に苦痛を与える場でしかない」と伝えるが、母親は登校を無理強いはしないまでも、学校を休ませ祖母の家に連れて行くことをまいに相談もなく決める。ここには子どもの気持ちや思いを受け止め考えるよりも、現実的な対処を優先する母親の姿が示されている。またそのような母親に自分の気持ちを言えない親子の関係性が見える。「優等生で感受性が強すぎる子、昔から扱いにくい子、生きていきにくいタイプ」と言う母親の言葉は、まいに自分が母親の期待に応えられない駄目な子であり、母親を失望させたために祖母の元に送られるという見捨てられ不安を喚起させたに違いない。実際、祖母の家にまいを送り届けた母親が挨拶もなく去ってしまった時、まいは「エレベーターをどこまでも落ちていくような痛みを伴う孤独感」を体験する。これはウィニコット（1987）が述べる、赤ん坊が母親対象を喪失した時“奈落に落ちる”と体験される心理状態や、“想像を絶する不安”に近い感情体験であったと思われる。

親離れのテーマを抱える思春期は依存と独立の葛藤に揺れ動く時期でもある。母親への依存や甘えが思春期の出発点に生じるが、それが得られない時不適応が生じやすくなる。クライン（1946）が、分離が起こる時には乳幼児期の離乳体験が蘇ると述べたように、この母親との分離体験がまいの心に愛と憎しみの葛藤や不安・恐怖などをもたらしたとしても不思議ではない。しかしこの物語では、まいが母親に対して憎しみや怒りを向けた記述は無い。代わりにゲンジが登場する。学校を休んで祖母の家に来たまいに「ええ身分じゃな」と言い放ったゲンジに対してまいは激しい怒りを感じる。この不安と怒りこそが、まいが心の中で母親に対してもっていた感情ではないだろうか。まいの内的世界には、学校を休む事を「良い身分だ」と責める母親がおり、その母親に対して怒りを感じていたが、怒りを母親に表出することは恐ろしいので、その感情をゲンジに投影し、ゲンジへの怒りとして表出したものと考えられる。ここには母親への感情をゲンジに転移することで、母親への怒りを回避するまいがいる。

その後、祖母の死まで、まいと母親の関わりは描かれていない。微妙に距離のある母子関係が窺える。

祖母が亡くなった時「この人はこういう死に方をする」と冷たく言い放つ母親の言葉は、祖母と母親の関係にも距離があったことを示している。まいが母親に甘えを表現できなかったように、母親も祖母に対して感情を抑圧して生きてきたのであろう。まいを部屋の外に出して祖母と2人になって慟哭した母親の心には、距離を取ることで否認していた実母への愛と憎しみ、そして失った悲しみが迸る。その後もまいと母親の距離ある関係は変化していない。しかし、祖母を代理対象とすることで思春期の移行を乗り越えて行ったまいは、親密な同性の友人を手に入れ、親離れを進展させたのである。

3, 祖母との関係

(1) 移行対象（transitional object）としての関わり

祖母の家に来てまいが見た夢【ひとり夜の海を泳いでいたまいは「西へ」という声を聞く】は、まいが海という無意識の世界に浸りながら、「西」が象徴する過去への退行や内的な世界、母性的・女性的な世界に向かうことを示している。「西へ」と誘う声（＝祖母）に守られながら、まいが新たな世界へと一歩を踏み出していくことが暗示されている。

まいは祖母との暮らしの中で野山の自然に触れ、鶏小屋から卵を得ること、畑仕事、洗濯、料理の手伝いなど身体や五感を使った生活を送る。赤ん坊を包み込む母親のような声のトーンやリズムをもつ、感情・情緒に溢れる祖母との触れ合いはまいを安心させる。祖母はまいの言葉にできない思いを受け止め、それをさりげなく言葉にしてまいに伝える。言葉だけでなく身体的にも holding される体験をまいは祖母との間にもつことになり、まいの心は温くもりに包まれ、母親との間では表現できなかった甘えや依存を祖母に向けるようになる。また口愛期に退行し、祖母からの母性的な支持や保護を得る。まいは理想化された良い母親対象を祖母に投影し、祖母もその役割を引き受けることで関係が紡がれる。この理想化された関係の中で、まいは祖母から情緒的エネルギーを補給し、母性や女性性を取り入れ、女性としてのアイデンティティを形成していった。

母親の補助自我に守られた幼児が自我肥大を起こして万能感を身に纏うように、理想化した祖母への同一化によってまいは次第に自己愛的万能感を持ち始める。理想化された関係は、まいが「良いもの」を自己に取り入れ自信を取り戻すことには寄与したが、万能な自己という副作用ももたらした。この錯覚の世界に留まっている限り現実に戻る事は出来ない。自己愛的万能感は現実と番い考えることのできるものにならなければ、心の成熟には至らないのである。ウィニコット（1996）は、母親との間で滋養を与えられ万能感体験によって錯覚を経験した子どもは、その次には母親の適応への

失敗によって傷つき幻滅し脱錯覚する必要があることについて論じている。脱錯覚体験は万能でない現実の自分を発見することに寄与する。健康な母親は、子どもが適応できる範囲内の“外傷を与える”ことによって、子どもを絶対的依存から相対的依存へと導く。

自己愛的万能感に基づくまいの衝動的発言、ゲンジへの「死ねばいい！」に対峙した祖母の言動は、まいに“外傷を与える”（母親の適応への失敗）体験になったと思われる。ここで生じた祖母への幻滅・失望体験はまいを現実に引き戻した。ここで祖母がただ母性的に子どもの欲求を満足させ続けたとしたら、まいは自己愛的万能感に浸ったままいつまでも祖母の元から離れられず、健康な発達は阻害されていたであろう。ウィニコット（前出）が“赤ん坊は、信頼の失敗がもたらす効果からコミュニケーションについて知ることしかできません”と述べるように、母親の失敗は赤ん坊の心に自分でないものの存在を自覚させ、分離した母親の存在に気づかせる効果をもつ。それは子どもが自立していく契機となる。しかし、母親の失敗は子どもの心に受け止められる程度のものでなければならないし、その失敗は修復される必要がある。

この点についてまいと祖母との関係から考えてみる。祖母に頬を打たれた当初は怒りと憎しみでいっぱいであったまいだが、時間の経過の中で祖母との体験を考えるようになる。心の傷になるような外傷体験は“考える”ことができないものであるが、まいの場合はそこまでの外傷とはならなかったようである。祖母との生活を思い出し、考える中で祖母との良い体験もまいの心に蘇り、祖母の良い面、悪い面の両方を見れるようになる。そして祖母との体験を心に置けるようになったまいは、怒りを向けたまま置き去りにしてきた祖母への罪悪感ももてるまでになった。これはまいの内的世界が祖母への怒りと憎しみに彩られた妄想－分裂ポジション（クライン，1946）から、思いやりや罪悪感を心に置ける抑うつポジションへと変化したことを意味しており、まいの心が健康に機能していることを示している。

祖母の死はまいの心に強い罪悪感を呼び起こした。心の中では「自分が見捨てたから祖母は死んだ。自分が優しくしていたら祖母は死ななかったのではないか」との自責の念が渦巻いていたものと思われる。この罪悪感とともに不安な心のままに置かれたならば、まいは自身の攻撃性を恐れることになり、他者との豊かな交流を失うことになったかもしれない。祖母への怒りと憎しみから祖母を見捨てたまいに、報復することなく愛を伝える祖母からの最後のメッセージは、まいの罪悪感を和らげるだけでなく、攻撃性や失敗は修復できることを伝えている。

乳幼児が母親との間で絶対依存を体験する中で万能であると錯覚し、母親の適応の失敗によって母親への失望と脱錯覚が生じ相対的依存へと移行していくように、思春期の子どもが移行期を乗り越えて行く時も同様のプロセスが展開していくものと思われる。母親との良い対象関係を基盤とした中で、母親の失敗に失望や幻滅を感じながらも、それが修正される体験は子どもの攻撃性を弱め、他者への信頼の獲得につながるのである。

ウィニコット（前出）は子どもが母子分離を体験する時、母親と自分の中間領域において分離不安を克服しようとする時に使用される移行対象について論じている。移行対象はほどよい授乳体験をした乳幼児が、自分が乳房を創造したと錯覚し万能感をもつ絶対的依存の段階から、現実を知覚し脱錯覚する相対的依存へと向かう時に機能する。移行空間において空想や錯覚、身体的記憶などによって内的現実と外的現実を繋いだり分離したりする経験は、自己と対象の中間領域を埋めてそれを支える足場となるのである。この中間領域とは“原初の創造性と現実吟味に基づく客観的知覚の間に存在することを許されているような領域”であり、“起きている状態から眠りへと移行する時に、子どもは知覚された世界から自ら創造した世界へ跳躍する”とウィニコット（前出）が述べるように、中間領域での体験が心の成長を促進するのである。

子どもから大人への移行期にあるまいにとって、祖母の家がまさにその中間領域であり、移行対象としての祖母との関わりが内界と外界、古い自分と新しい自分、古い親対象像と新しい親対象像などについて考える中立地帯として機能し、まいの児童期から思春期への移行を橋渡ししたものと考えられる。

(2) 魔女修行が意味すること

魔女とは「身体を癒やす草木に対する知識、荒々しい支援と共存する知恵、予想される困難をかわしたり、耐え抜く力」をもっている人だと祖母はまいに教える。まいは魔女になれば様々な障害を避けながらスムーズに生きられると考え魔女修行を始める。まいの魔女修行の目的は脆弱な自己を補償する魔法という万能の杖を手に入れることであり、自他をコントロールする力を得ようとすることである。しかし祖母いう魔女修行とは「正しい方向にアンテナを立て、身体と心がそれ

をしっかり受け止める精神力」や「規則正しい生活」「意思の力、自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げる力」を養うことであり、それはむしろ万能感を制御し自我機能を高め、自分自身について考える能力を促進するものである。

心理臨床家の仕事は、暖かくクライエントを抱え、内的世界と交流しながら心の奥深くにある不安や葛藤に直面することを促し、クライエントの受け入れがたい情動をコンテインすることを通して、クライエントのパーソナリティや対象関係が変容することを目指している。特に心理療法の導入期には、赤ん坊が母親に依存し抱えられることを通して安心感を得るように、クライエントはセラピストとの間で安心できる“良い体験”をすることが必要となるが、祖母のまいへの関わりは、まさに心理療法導入期におけるクライエントとセラピストの関係のようである。魔女修行も、面接構造を守ることや、セラピストとの対話によって自己を探索し、自分の考えや思いを意識化していくことが求められる力動的な心理療法を思わせる。祖母のまいへの関わりは、きわめて治療的である。

セラピストへの安心と信頼は、良い対象としてのセラピストへの陽性転移や理想化を生み、同一化や取り入れを促す。良い対象の取り入れによって自身を良い自己と感じることが可能になったクライエントは健康な自己愛を取り戻し自分を肯定的に捉えられるようになるが、それが過剰となると自我肥大によって自己愛的万能感が高まり、欲求不満や失望、怒りを体験することになる。展開期の中期以降になると理想化対象は幻滅され、クライエントの心が健康であれば良い面と悪い面をもった現実の対象として受け止められるようになるが、健康度が低い場合は陰性転移が表出して面接は中断や膠着することにもなる。

ゲンジのことで祖母と対立した時、まいと祖母の関係は心理療法の展開期中期と同様の展開をする。心理療法ではセラピストがクライエントの身体に触れる事はあり得ないが、セラピストに怒りをぶつけても報復されず関係が壊れない体験が、クライエントの攻撃性への恐れを減じることに寄与するのである。祖母とまいの関係に生じた深い情動を伴う実存的な対決が、セラピー場面でも生まれ、それがパーソナリティの変容をもたらすのである。まいの頬を打った祖母の行動は、実存的対決の意味に加えて、祖母も怒りや衝動的感情をもつ一人の人間であることをまいに実感させ、何でもできる魔女として理想化された、祖母に対する内的な対象イメージは幻滅される事になった。魔法がとけるように、まいは現実を見るのである。別れの日、そこには孫との関係を修復できない事を悼み、別れを悲しむ年老いた祖母の姿があった。

4, ゲンジ・父親との関係

(1) 性・衝動のコントロール

祖母の家に来た初日、まいはレタス畑でナメクジを見る。祖母との生活の中でナメクジが象徴する性や生々しく不快なものとこれから出会っていくことが暗示されている。さらに、小さい頃道を蛇が横切ったのを想起したすぐ後に、ゲンジが置いたと思われる裸の女性の雑誌を目にする。性が意識され、それへの関心と恐れの存在が見て取れる。鶏が襲われて死んでしまったことへのまいの過剰な反応と、その後にまいが聞いた声「厭わしい、肉をもつ身は厭わしい」は、まいの中にも“肉”が象徴する性や衝動性、攻撃性が宿っており、それを受け入れがたいまいがいることを示している。

思春期の子どもは、人を殺す力や子どもを産む・産ませる能力を得る。児童期にはなかったこの力は衝動性の強まりと相まって子どもの心に不安な影を落とす。「肉をもつ身は厭わしい」は、まさにこの能力や力を持った自分を厭わしく感じていることを顕しているのだろう。＜蟹が脱皮をする夢＞からは、子どもの自分が大人の自分に変化していくことを肯定的に捉えようとする面も窺えるが、“肉”の自分を受け入れることは容易ではない。

まいがゲンジを嫌悪したのは、自分を性を感じない子ども、すなわち身体をもたない魂だけの存在であろうとするために、受け入れがたい性や衝動性、攻撃性など厭わしいものは全てゲンジに投影し、それらを否認する心的防衛であったと考えられる。ゲンジがまいの聖域に侵入し祖母の土地を搾取しようとしていると、祖母との対立も辞さないほど激怒したのは、単なる土地の搾取という現実の問題ではなく、ゲンジがまいの身体の内部に侵入し犯しているという内的空想を生じさせた故だと考えられる。まいが必死に守っている聖域、つまり性をもたない子どもの清い領域に“肉”が入り込むことへの恐れを防衛するために怒りが発動したのである。さらに“肉”が意識に入り込むことはエディプス・コンプレックスを刺激し、祖母との幼児的な関係が失われ競合的な関係になってしまう事への恐れでもあったと思われる。

祖母の死後出会ったゲンジが、威嚇するような横柄な態度ではなく弱々しくまいに感じられたということは、2年前にまいが見ていたゲンジはまいの不安を投影した内的対象であったことを示している。そして現

実のゲンジを直視できるようになったということは、今のまいにとって性や衝動性はそれほど恐ろしいものではなく、ある程度心に置けるものに変化したと考えられる。

(2) エディプス・コンプレックス

フロイト（1916）は、異性の親に愛情を向け執着し同性の親に敵意を向けるエディプス期以前に、女児は同性でかつ愛情対象である母親の愛情をめぐって父親をライバルと感じたり、母親との愛情関係の妨害者と感じる時期があることを論じている。この「前エディプス期」にある女児は自分も男性同様にペニスを有しているかのように感じていて、父親が母親に接するように能動的に振る舞う。「エディプス期」に入ると愛情対象は母親から父親に移行し、能動性は受動性に変化するとともに、ペニスがないことを受け入れる代わりに父親の子どもを産むことを想像し、女性としてのアイデンティティを確立していくと考えられている。

思春期はこのエディプス・コンプレックスが再燃される年代であると言われるが、この物語の主人公まいの場合、父親は単身赴任、母親は仕事に多忙な家族状況にあり、3 者関係の情緒的交流があまり描かれていない。ただ、祖母の家に来た父親に対してベットメイキングをするなど妻のように世話を焼くまいには、母親に代わって父親の愛を得ようとする受け身的－女性的な「エディプス期」の有り様が見られる。しかし、「エディプス期」であるならば、母親に対して不満や批判、敵意などの陰性感情をむけても不思議ではないが、まいはこの物語の中では一度も反発する言動をしていない。まいは母親に敵意も向けない代わりに、依存も表現しない。敵意よりも母親の不在を孤独感じ不安になるまいがいることからすると、祖母の家に来た時のまいはまだ「前エディプス期」にあり、母親への愛情を求める段階にあったと考えられる。その愛情が十分得られないこともまいの不登校の一因であったのかもしれない。思春期の女の子が親と分離して自立へと向かう少し前の一時期、母親に依存を向ける時期があることを筆者は経験的に知っている。自立的な児童期を送っていた子どもが、急に母親にまとわりついたり、母親との接触を持ちたがるのである。「前エディプス期」から「エディプス期」への移行期にある女の子や、「前エディプス期」に母親との十分な愛情関係を享受していない子どもには、一時的に愛情・依存欲求を抱える対象が必要であり、逆説的ではあるがその体験が子どもの分離と自立を支えることに繋がると筆者は考えている。

事実、まいは祖母との間で、幼児期に退行したような愛着と依存をむける関係を展開し、母親から得られなかった愛情を祖母から得る。そして、母親・父親・まいの三者関係は、祖母・ゲンジ・まいとの三者関係に転移され、「前エディプス期」が再演された。まいの内的空想では、ゲンジ（父親）は、祖母（母親）との二者関係を邪魔する存在であり、祖母（母親）の愛情をめぐるライバルとなる。現実の関係の中で、祖母がゲンジを擁護することは、内的には祖母（母親）が自分よりゲンジ（父親）を愛しているとまいには感じられ、ゲンジ（父親）との競合関係に負けたと体験されたのだろう。

しかしここまで激しい怒りが生じた背景には「エディプス期」的心性も機能していたと考えられる。祖母とゲンジ（母親と父親）は結合したカップル（両親結合像・ビオン）であり、まいはその結合から自分一人排除されていることへの怒りや、結合両親像への羨望が生じたために、これ程までの激しい怒りを露わにしたのだろう。

思春期の入り口にいる女の子の心には、このような「前エディプス期」と「エディプス期」が混在し、その心のゆらぎも子どもの心を不安にし、不穏にしているように思われる。まいのように「前エディプス期」を十分に体験していない子どもは、より混在した状況が生じやすくなるものと考えられる。

V，おわりに

思春期は、幼児期に形成された理想化された父母像に対する脱備給や脱錯覚による対象喪失が起こる時期（小此木，1998）であると言われる。母親との分離が生じるためには、それ以前にしっかりとした愛着・依存の関係が形成されている必要がある。思春期の子どもはそれを土台として、子どもから大人への移行期を乗り越えて行くものと考えられる。

親との関係が希薄であったまいが、祖母を代理の対象として愛着・依存の関係を築き、子どもとしての自己に情緒的エネルギーを補給するとともに、理想化と同一化によって祖母から母性や女性性といった良いパーソナリティ部分を取り入れ、自己愛的万能感をもつに至った。それは思春期の不安に彩られたまいの心に自信と自己肯定感を与え自己主張や自己表現を促したが、一方で肥大した自己は衝動や攻撃性も活性化することになった。理想化は脱錯覚され現実に引き戻されるが、それはまいの心に幻滅と失望と怒りをもたらした。怒

りから祖母を傷つけたことへの罪悪感は、祖母の最後の言葉によって修復され、まいは愛情も攻撃性もともに自分の中にあるものとして受け入れることが可能となり、自分について考えることのできる女性へと成長して行くことができたのである。この体験を可能にしたのは、思春期の子どもが現実から引きこもり“一旦休止”することを引き受け、移行の橋渡しをした祖母の存在である。思春期の子どもが移行期を乗り越え健康に成長して行くためには、自分自身と向き合うための時間と空間を供する“一旦休止”を保障することと、その移行を抱える対象の存在が重要になることを示した。

思春期の心は、喪失と獲得、依存と独立、万能と脆弱、強い弱い、愛と憎しみ、肯定と否定など両極端に振れ幅が大きく、良いか悪いかのどちらかに分裂した世界を展開しがちである。それは子どもにも大人にもなれず自己を定位できない思春期の子どもが、確かさを求めるための行為でもある。この分裂した世界をまとまりのあるものにするためには、中間領域にあってその移行を橋渡しする対象との関係の中で、子ども達がこの 2 つの世界を弁証法的に捉え、考えることを通して相対する世界を心に置けるようになることが望まれるのである。

思春期の混乱を抜けていく方法にはいくつかのタイプがある。親に反発して同性でグループに凝集することで不安を回避するタイプ、家族と結びつき良い子のまま思春期を過ごすタイプ、親に失望し自分の野心や目的に邁進するタイプ、孤立したまま親ともグループからも距離を取るタイプ、そしてまいのように、思春期への移行期に“一旦休止”するタイプである。“一旦休止”するために不登校が選択されるが、そこには母子分離不安からの退行としての“一旦休止”や、単なる休息としての“一旦休止”も含まれる。子どもの心が何処にあるのか、何を希求しているのかといった観点から子どもの心を見極めることが重要となる。

祖母との間で愛と憎しみの両方を体験し、それについて考え、その両方を心に置けるようになったまいの体験や魔女修行は、思春期の移行を助けるだけでなく、その後の人生において遭遇するであろう愛と憎しみ、喪失体験を乗り越える時の雛形になるものと思われる。

文献

Freud, S（1916）Psyco－ Analysis 縣田克躬他訳（1971）精神分析入門　人文書院

Jan Abram（1996）The Language of Winnicott. First published by H. Karnac Ltd. 館直彦監訳（2006）ウィニコット用語辞典　誠信書房

北山修（2001）精神分析理論と臨床　誠信書房　140－147

klein, M.（1946）Note on some schizoid mechanisms, Int. J. Psycoanal. 27. in, The Writings of Melanie Klein, Vol. 3. Hogath Press, London. 狩野力八郎他訳（1985）分裂機制についての覚書　メラニークライン著作集 4.　誠信書房.

中井久夫（2011）「思春期を考える」ことについて　ちくま学芸文庫　23－30

梨木香歩（2001）西の魔女が死んだ　新潮文庫

小此木敬吾他編（1985）精神分析セミナーⅤ　発達とライフサイクルの観点　岩崎学術出版　141－154

小此木敬吾他編（1998）精神医学ハンドブック　創元社

Winnicott, D. W（1961）Adolescence: Struggling through the doldrums. In（1968）The family and Individual Development. Social Science Paperback.

Winnicott, D. W（1987）Babies and their mothers. Clare Winnicott（ed.）The Winnicott Trust 成田善弘・根本真弓訳（1993）赤ん坊と母親　岩崎学術出版

The Psychology of Early Adolescent Females with School Refusal Problems in "The Witch of the West is Dead": Psychoanalytic and Object−Relations Theory Perspectives

Faculty of Psychology, Department of Clinical Psychology
Mayumi NEMOTO

Abstract

In this paper, I use Kaho Nashiki's story "The Witch of the West is Dead" as clinical material to discuss school refusal and the inner world of early adolescent females from both psychoanalytic and object−relations perspectives. It has long been understood that there are both external and internal factors related to refusal to attend school among early adolescents. I investigate a new developmental factor and present school refusal as a "pause" during a transitional period.

Adolescents who were "good" children, or who did not have an appropriate dependency on their parents, can become unable to maintain continuous development. The result can be confusion due to a split between old and new selves as they enter adolescence. By withdrawing from reality into a "pause", they acquire transitional space for creating a new self. They can develop healthily by reexamining themselves and their relationship with their parents. I discuss the importance of the substitutive object (transitional object) of the mother, who provides comfort and security, accepting the idealization from adolescent, but also helping in the process of disillusionment and restoration. I also discuss the inner world of adolescent females during the transitional period in which "pre−oedipal phase" and "oedipal phase" coexist.

Keywords: early adolescent, school refusal, Object−Relations Theory, transitional object, oedipal complex